



平成28年1月1日発行

第14号

京田辺市観光ボランティア

ガイド協会 広報部編集

☎ 0774-68-2810

平成28年 新年のごあいさつ

あけましておめでとうございます。

平成19年に発足しました当協会も9年目を迎えました。メンバーも31人を数えるまでになり、ますます活動の幅を広げつつあります。

昨年は観光協会が一般社団法人に移行し、私たちも観光協会との新たな関係を色々と模索をする一年でした。今年は観光協会との連携を一層深めて行くとともに、私たちも一段とステップアップし、目的意識を持った活動を展開してまいります。

今、観光事業は国、京都府の重要な推進事業になっており、我々もその波に乗って一層の事業拡大を図るべく①観光協会との連携強化、②ふれあいハイクの充実、京田辺市の神社仏閣、史跡の紹介など、従来事業の見直しと新規事業の創設等を図っていきます。

私たち観光ボランティアガイドは新年にあたりまして、以上の決意も新たに市民の皆様や観光客の皆様との出会いを大切に、わが町「京田辺」の活性化、好感度に少しでも寄与すべく全力を挙げて活動したいと思っておりますので、どうかご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。（代表 園上雅晴）



研修会より「南山城の中世の城館」

中世の城館とは、平安後期に武士が力を持つてくる頃から関ヶ原の戦い以前までに作られた城や地域の有力者の館のことで、当初は「城」の字の通り土で成っており、堀や土塁などの防御施設を備えていることが共通の特徴です。

中世の日本列島には約3～4万もの城館が築かれ「大築城時代」といいます。

中世には、源平の合戦、南北朝の内乱、応仁・文明の乱など多くの戦いがあり、14世紀（南北朝時代）に爆発的に山城が出現します。南山城の城館も、また、この時代のものです。

戦が恒常化する事によって、城は天然の要塞に加えて人工的な防御施設が発達し、曲輪（駐屯場所）、堀切（遮断線）、土塁（防御壁）に加えて切岸（遮断壁）などが築られました。

京田辺市にも、都谷中世城館（同志社田辺キャンパスも城館跡か？）、普賢寺谷に集中する城館跡、市役所近くの田辺城跡など、いくつかの城館跡があります。

なかでも田辺城跡から発掘された15世紀末から16世紀初頭の枡形虎口の石垣は、矢穴技法で割られた花崗岩で組まれており、城郭研究



田辺城跡 枡形虎口

の常識を変える発見があったということです。（今は復旧され見ることはできません）

そのほかにも南山城最大の鹿背山城（木津市）の遺構など数多くの城館跡が点在しています。我々も勉強し、今も山中に残る城郭遺構を訪れ、戦国時代を体感していきたいと思っております。（新井）

シリーズ「仏塔(塔)の知識 ①」

1. 塔の起源

仏塔は釈迦のお墓(ストゥーパ)です。インド中部には三基の古いストゥーパが現存しており、その一基は仏教を広めたアショカ王が建てたといわれています。

インド仏教は紀元前243年、アショカ王の息子マヒンダと娘サンガミッターによりスリランカ各地に伝えられ、ミャンマー、タイへと伝えられました。(小乗仏教)又、西インドからシルクロードを経て中国に伝わり、大乘仏教として日本に伝来しました。



サンチーの塔(インド)

小乗仏教の仏塔はお椀をかぶせたような形が多いのに対し、大乘仏教の仏塔は中国の樓閣建築と結びつき、その頭上に小型化したストゥーパを載せるという形式になりました。これが日本に伝わり、三重塔、五重塔などの形になります。

ストゥーパは日本語で「卒塔婆」と書き、これが「塔婆」と略され、そして「塔」になります。

日本には葬儀の際、死者の墓に木板の「卒塔婆」を立て死者を送りますが、ほとんどの家では「塔」を建てる事ができませんので「卒塔婆」で代用します。「卒塔婆」をよく見ると五輪塔の形をしています。

日本の仏塔は、飛鳥、奈良時代前期までは、伽藍の中心に位置し金堂と共に重要な建物でした。時代の変遷と共に伽藍の側面に置かれるようになり、塔の本来の役目から寺院を象徴するための建造物となります。江戸時代には大工の腕を発揮する豪華な彫刻を施した「見せる塔」へと意味合いが変わっていきました。

2 塔の種類

① 多層塔(多重塔)

•三重塔、五重塔・・・各層とも内部空間を設け軸部を明確にしている塔

三重塔:薬師寺、法華寺、浄瑠璃寺、

五重塔:東寺、仁和寺、法観寺、

•檐塔(えんとう):二層より上は軒と屋根が重ねられた塔 奈良県の談山神社十三重塔

②多宝塔

初層は方形で、この上に平面が円形の上層を重ね、宝形造(四角錐形)の屋根を有する二層塔婆を「多宝塔」といいます。

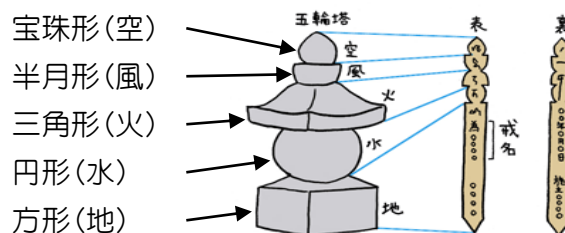
一般的には初層の宝形の一面の長さが三間以下を多宝塔といい、五間以上を大塔といいます。



根来寺大塔(国宝)

③五輪塔

平安中期から使われた墓石、供養塔です。それぞれ方形・円形・三角形・半月形・宝珠形の石材を順に積み上げてつくります。



④相輪塔

法華経を始めたくさんの経典が納められている塔で、現在、天海大僧正が建造した相輪塔の内、三基が残っています。



相輪塔

⑤笠塔婆

板状または柱状の背の高い塔身の上に笠・宝珠をのせた塔をいいます。(藤野)

管外研修会「南山の辺の道」

管外研修「継体天皇所縁の地を訪ねて」第3部を7月15日にガイド18名が参加して実施しました。

今回は第26代継体天皇の皇后、手白香皇女(たしろかのみめみこ)の御陵「衾田の陵(ふすまだのみささぎ)」を見学するのが主な目的です。

近鉄新田辺駅を朝7時過ぎに出発。JR 万葉まほろば線の長柄駅から巻向駅までを歩きました。

日本最古の大和神社で道中の安全を祈願し、山の辺の道を進むと山裾の大きな森が目指す「衾田の陵」。果樹園を抜け拝所から振り向くと奈良盆地が一望でき



衾田陵

ます。全長230mの広大な御陵に祀られた手白香皇女は仁賢天皇の皇女であり、武烈天皇の姉妹。後継者が絶えた武烈天皇のあとを託された継体天皇は手白香皇女を皇后にむかえ、大和に入りました。欽明天皇の生母でもあります。

御陵にお参りした後、最古の官道、山の辺の道をたどり、長岳寺でご住職の法話を伺い、天理トレイルセンターで昼食。黒塚古墳展示館を経て、「卑弥呼」の墓ともいわれる箸墓古墳を見学して帰路につきました。猛暑の研修にも日頃ガイドで鍛えたメンバーは元気に歩き通しました。（竹村）

ボランティアガイド日誌

9月26日 JRふれあいハイク夏号

「初秋の甘南備山から平安京を望む」

近畿各地から72名が参加され、快晴のもと木陰のそよ風に初秋を感じながら、京田辺市と枚方市の境界、竜王山の稜線を歩きました。

JR大住駅を出発し、そよかぜ幼稚園の脇から毎年4月13日に「十三まいり」で賑わう虚空蔵堂を経て、竜王谷の滝でしばし涼を満喫。

野外センターで休憩後、甘南備山を目指して尾根コースを縦走。山頂付近の三角点(201.6m)からの展望はすばらしく、平安京造営の際、船岡山と甘南備山を結ぶ線を朱雀大路に決めたと伝わる、いにしへの平安京に想いをはせました。

展望台で昼食。下山途中、沼地に生える「落羽松(らくうしょう)」という不思議な気根を観察したり、秋の木の実や満開のツリフネ草の群生など多くの野草に皆さんも感激されていました。

雨乞いの道を軽快に下り、吉やんの滝を経て、耳の仏として信仰のある甘南備寺を拝観し、午後3時頃、全員無事JR京田辺駅に到着。好天に恵ま

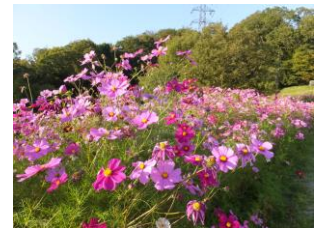
れ皆さん満足して家路につかれました。(三宅)

10月17日JRふれあいハイク秋号

「京田辺の雲上尾根歩きと古社寺やコスモス園を巡る」

「京田辺アルプス」の雲上尾根歩きと、枚方市穂谷のコスモス園鑑賞がコースの見どころです。しかし、下見の際に昨年に比べてコスモスが大幅に減っていて大慌て。出発時にその旨をお詫びしてのスタートとなりました。高船へのバス車窓に棚田が広がり、まだ残る稲刈前の田の黄金色が美しく、まさに瑞穂の国の感です。極楽寺では奥様の説明を受け、京田辺市の最高峰千鉾山では、江戸中期に大坂堂島の米相場を手旗信号でルーした話を紹介。「朝ドラ」でのタイムリーな放送と相まって皆さん興味を示されましたが、千鉾山からの展望が全くきかないのが残念。のんびりと尾根歩きを楽しみ、三国境を越えて朱智神社へ。山深いこの地にある朱智神社の歴史と創建当時の彩色復原に感嘆されていました。

朱智神社での昼食後、穂谷に向いました。「予想したよりもコスモスが多い」との声にひとまず安堵し、さらに甘南備山西麓の畑地にもコスモスの一群があり、その見事な美しさに感動。失地回復につながるコスモスにただ感謝しました。「来て良かった」との参加者の声



穂谷のコスモス園

がなにより嬉しい一日でした。そこで拙作、「秋高し木漏れ日揺れる尾根の道」(古野)

11月21日 宇治茶歴史街道ウオーク

「一休さんと玉露の産地京田辺で茶香服体験」

茶香服を主テーマにハイキングを開催しました。

茶香服は、宋の時代中国で始まり、日本でも南北朝の時代から室町時代にかけて、貴族や武士の間で「闘茶(とうちゃ)」呼ばれ、賭け事として大流行し、禁止令が出るほどの人気でした。

茶香服のやり方は5種のお茶を飲み比べ、そのお茶の種類を当てるというゲームです。

玉露は京田辺市が日本有数の産地(農水大臣賞を数多く受賞)です。ハイキングに茶香服を取入れて、お茶の良さ・おいしさや京田辺のお茶を知っていただきと企画しました。

参加者は、地元をはじめ京都府下や他府県からも多く来られ、合計57名にも及びました。初めて体験された方が80%以上で、皆様から「大変面白かった」という意見を多く寄せていただきました。

京田辺市が優れた玉露の産地であることや、おいしいお茶の入れ方を説明し、参加者の方々にお茶のすばらしさをアピールできました。(田原)

シリーズ「玉露のはなし ②」

わが国においては、奈良時代から団茶(蒸した茶葉について固めて乾燥させたもの)という形で、茶が飲まれていたといえます。しかし、日本人の好みに合わず、遠ざかっていた茶が、日本文化の担い手として登場するのが鎌倉時代です。

○栄西禅師の茶種の普及

栄西禅師が、宋から持ち帰った茶種を、京都梅尾の明恵上人をはじめ各地に伝え、また、禅師が「喫茶養生記」を著し、蒸茶の製法と抹茶の喫茶法を伝えた事が一つのエポックとなって、茶が次第に全国に普及していったといわれています。

宇治茶の発達についても、これが大きな契機となったのは言うまでもありません。

宇治萬福寺の山門前には、「駒蹄影園趾」の碑が立ち、茶種の播き方を教えたと記されています。



万福寺の駒蹄影園趾

○本茶と非茶…その違いは？

室町時代にはいると、茶の栽培が各地で進み、茶をたしなむだけでなく、余波に「闘茶」が各地で盛んに行われるようになります。これは「本茶」と「非茶」を飲み当てるゲームで、今日「茶香服」として受け継がれているものです。その当時、梅尾茶を「本茶」とし、他の産地のお茶はすべて「非茶」とされました。「同じ栄西禅師から頂いた茶種

なのになぜ非茶なのか？」その思いが大きなバネになったのではないのでしょうか。「梅尾では、どんな自然条件のもとで、どんな栽培がされているのか？」宇治の茶農家の人達にとって、大きな疑問であり、学ぶべきテーマであったのでしょうか。

「場所はそう遠くはない、一度見に行こう」今でいう研修会というところでしょうか。

○覆下園の創造と発達

そこで宇治の茶農家の人達は何を見たのか？川霧のたちこめる茶畑は、百人一首にも詠われている通り「あさぼらけ 宇治の川霧たえだえに…」と宇治も負けてはいません。

でも、日当たりのいい宇治の丘陵地と違って、梅尾の山深い山麓に植えられた茶樹の日照時間の短かさ、陽はすぐに山陰に隠れます。日照も、大きな杉やヒノキの枝にさえぎられて、やわらかい木洩れ日を浴びているときが多いのです。

晩霜を避けるため稲わらをかぶせておいたら、柔らかい茶葉が出来たという話も聞きます。そうであれば茶樹に影をつくってやれば、いっそ、茶園全体をおおってしまえば良いのではないか。巨椋の池には材料のヨシが一杯あるし、竹も藁もたくさんあります。こうして、宇治の農家の人たちのためめ研鑽の結果として覆下茶園が広がっていったと思われます。

そして14世紀には、この覆下園による宇治茶の生産が、梅尾茶にとって代わって宇治茶を「本茶」とし、やがては玉露の創生にもつながっていくのです。(春)

今後のJRふれあいハイクのご案内

平成28年1月30日(土)

『京田辺の古代史の謎を巡る パート2』

平成28年2月11日(祝・木)

『二月堂お水取りの竹送りを訪ねる』

* お問い合わせお申込みは観光案内所まで。

Tel 0774-68-2810